

ニーチェの「超人」思想

——シュタイナーのニーチェ論を手がかりに——

森本倫代

東京工芸大学芸術学部非常勤講師

An Approach to Nietzsche's Thought *Übermensch* through Steiner's Essay on Nietzsche

MORIMOTO Michiyo

Tokyo Polytechnic University, Faculty of Arts, Lecturer

(Received November 12, 2005 ; Accepted January 18, 2006)

はじめに

ニーチェ (Friedrich Nietzsche 1844-1900) は、産業革命を経て経済活動と国家形成に邁進する19世紀のヨーロッパに生きた哲学者である。その言葉は、社会の伝統的な価値観がもはやわれわれの生活や人生に確固たる枠組みを与えることのなくなった現代の社会において、ますます切実に響いている。ニーチェ思想を、教育において生かすための試みは、すでに100年程続いている¹⁾。しかし、ニーチェの思想、特に後期の思想には、思想そのものとしてはもちろん²⁾、教育学理論としても、受け容れる上での困難さが指摘されてきた³⁾。

本論では、その困難さを受けとめつつ、ニーチェの「超人」思想の意義を、シュタイナー (Rudolf Steiner 1861-1925) のニーチェ論⁴⁾を通じて捉えることとしたい。シュタイナーは、ニーチェとほぼ同じ時代に生まれている。シュタイナーは、ニーチェの作品を初めて読んだ折、ニーチェとは全く異なる過程を経て得た自分の考えが、ニーチェの獲得した考えとにかなりの類似 (Ähnlichkeit) のあることに気付き、ニーチェがまるで自分のために書いてくれたかのようにその言葉を理解したと述べている⁵⁾。また、ニーチェを論じた著書『ニーチェ——同時代との闘争者—— (Friedrich Nietzsche, ein Kämpfer gegen seine Zeit. 1895)』の序文においても、ニーチェの幾つかの著作⁶⁾と、既に刊行された自分の著書⁷⁾には、同じ根本的なものの考え方 (dieselbe Gesinnung) があると記している。さらに、シュタイナーの哲学的著書『自由の哲学 (Philosophie der Freiheit. 1894)』においても、確かに思索の積み上げ方は異なるものの、ニーチェと根本的に一致する見解が相当数含まれていることが確認できる⁸⁾。

このため、以下において、ニーチェの「超人」思想の

解釈をシュタイナーの見方を参照して整理し、受容の仕方、およびその今日的意義を確認して行きたい。基本的には、教育学でもすでになされてきた解釈 (すなわち自己の教育[形成]を促す思想との捉え方) に等しくなることと予想されるが、解釈の中に現実的実感と奥行きがもたらされることと思う⁹⁾。

1. 「超人」思想の解釈

ニーチェは、大学と付属ギムナジウムの教師であった時期に、教育に関する発言を著作や公開講演の中で行った。教育論は、概ね批判の形をとり、当時のギムナジウムでの言語教育、また学問的傾向、社会・国家の風潮の問題を挙げ連ねている。批判の中心にあったものが、教養の内実の変化である。

ニーチェの理想とする教養は、卓越した表現力をもつ先人の作品に、個々人が全身全霊をかけてとり組むことで獲得されていくものであり、各人が個別にとり組む厳しい自己教育 (Selbsterziehung)、自己訓練 (Selbstzucht) の道のりである。理想の教養を自ら希求しつづけることができない限り、継続は難しい。けれども、道のりの先には、理想的教養への憧憬を高める存在として、創造性に富む先人たち (「天才」と訳されるが、創造的精神という意味合いの Genius, Genie) がいた。そして、一種の倫理的崇高さ (eine gewissen sittlichen Erhabenheit) をもつ者や、英雄主義、献身への本能 (Instinkt) をもつ者、教養への欲求 (Bedürfnis) をもつ者には、歩みを進めることができるとされた¹⁰⁾。

このような教育・教養論は、30代半ば頃からの作品には消えていくが、生と精神の一体化した偉大な創造的精神を目指そうとする自己形成への要求はモチーフとして消えることはなく、後に「超人 (Übermensch)」思想となってあらわれる。「超人」思想は、ニーチェの後期の

始まる頃にあらわれはじめ、主著『ツァラトゥストラはかく語りき (Also Sprach Zarathustra. 1883-5)』¹¹⁾において象徴的に呈示される。

「超人」とは、抑圧や困難に打ち克ち、各人が本来もつ自己の特質を力強く発現し、高貴に生きる存在であり、現にある自己を越えて常に成長する。彼らは、自己というものに誇りをもっており、自分の理想を自分自ら描き出し、実現しようとする。また、他者にも同様に、他者自身の求める理想が獲得されることを望む。それは、今ある人間よりも高みにある存在であると述べられている。

「超人」を目指そうとする者は、常に「自己超克 (Selbstüberwindung)」している。「自己超克」とは、目的やより高いものに向かって行こうとする衝動に従って、自らを引き上げようとすることである。それは、こうありたいと欲している自分の本心が外部からの考え方によって抑圧されていることに気付いた場合、その外部の考えとそれに囚われた自分から脱却するよう求める。つまり、自分で自分に「今ある自己を克服せよ」と命じ、自らをその命令に従わせる。このような「自己超克」を重ねて、自分の意志も精神も解放されていくと、「超人」の在り方に近づく。

この過程をニーチェは次のようにも表現している。精神は、初め、最も重い荷を担い、その重みに耐えることを欲するが、その後、他のいかなる者にも従わず「我欲す (sich will«)」と言う精神のもとに生きるようになる。そして最後に、経験したことのすべてを（快樂だけでなくあらゆる苦痛も共に）肯定する (Ja-sagen) 境地へ至る。この第三段階は「幼子 (Kind)」であるとされている。「幼子」は、自らの欲するまま軽やかに動き、すべてを肯定できる境地にある。それは、「超人」の特徴として語られる内容と重なっている¹²⁾。

ところで、「超人」には、次のような批判が伴われる——同情を排し、平等や祈る行為を否定し、人間を強さ (der Starke) と弱さ (die Schwäche) とで二分する、等々。また、社会の既存の価値観をことごとく否定する言論も展開される。これらの批判はあまりに烈しく、「超人」思想そのものを、人間の独善的な利己主義と強者の支配を正当化する思想であるかのような印象にしてしまう。だが、これらのニーチェの批判のかなりの部分は、「超人」思想の意図するところから読み解くと十分納得できるものなのである。そこで、この「超人」思想の意図を、ニーチェと根本的な見解を同じくするシュタイナーの哲学を参照して捉えることとしたい。

シュタイナーの解釈では、「超人」思想とは、この世に自身が存在することの目的と意味 (der Zweck und Sinn seines Daseins) を、人が、自分自身の内部に (in

sich selbst) 求め、各人の本質 (Wesen) の内にそれにふさわしく生 (人生) を形づくることをうたえるための思想である。彼は、自ら創り出した英知 (Weisheit) で満たされ、物事の受動的傍観者 (leidender Zuschauer) とはならず、己の知ろうとする世界に対しておこなう洞察と一体となる (Eins geworden mit seiner Erkenntnis)。彼は、自分の理想を、自分のために (um sich zu dienen) つくり出している。そして、そのことに自分自身気付いている。このため彼は、自分の目的を放置して、一般的な目的 (unpersönliche Ziele) に仕えることはない。「超人」は、自分の力を開花させ、完成させるために役立てられる徳 (Tugenden) を身に付ける。

このシュタイナーの「超人」の解釈は、シュタイナー自身の哲学思想と照らし合わせると、より明瞭に理解できる。そこで次に、シュタイナーの思想を介して「超人」思想の意義を探ることとしたい。

2. シュタイナーの『自由の哲学』との関わり

シュタイナーの哲学的な主著『自由の哲学』¹³⁾には、ニーチェの主張と驚くほど共通点が見出される。例えば、次のような文章である——「どんな瞬間にも自分自身に従える人間だけが自由なのである」。「自由な精神の持ち主は、外からの強制から自分を引き離す」。シュタイナーも、ニーチェのように、人間が、各自の内部で外へ現れ出ようとするもの、すなわち固有の本質を引き出すことを訴えていた。「人間は、自分の力で自分の内なる素材に変化を加えることができないとすれば、不完全な状態に留まり続ける」が、自分の「存在を内部から自由な存在につくり変えるのは、もっぱら自分だけ」と述べる。そして、人間が、「他者の力 (eine fremde Gewalt)」に拠らず、また支配されず、自らそうすることが正しいと思ったことを行えることが、真に自由な状態であると考えていた。(PF S. 164-170)

ここでいう「他者の力」には、自分に対し外から加えられるものとしての道徳規範も含まれる。自分が自ら「よい」と判断し、選び取っていない場合は、たとえ人道的な内容であっても、その人間は行為の主体とは呼べないとしている。自分自身の内部に、行為の根拠がない限り、その行為は押し付けのものであり、対象に愛をもってもいない。そして、「道徳的に不自由な人だけが、同じ本能や義務感に従わない人を排除する」。(PF S. 161-2)

このシュタイナーの主張のほとんどすべてが、ニーチェの後期「超人」思想の意図するところに重なり、道徳批判の根本的動機を説明しているだろう。ニーチェは、真に自己自身の望むところから従って人が自らを自由な存在

につくり変えることを望んだ。しかしながら人々の現状はそれとかけ離れており、もっぱら、社会通念としての善悪などの「他者の力」に依存し、自分を見過ごしているとニーチェは見た。このためニーチェは、自身が真に希望することが「他者の力」により巧みにすり替えられていることを自覚していない人間の在り様と、自覚に至ることのない人間の弱さを非難したのである。

シュタイナーには、さらに、個々人が内に秘めた特質を自らの力で完全に発揮させていくことを肯定するさらに積極的な主張がみられる——人間ならではの性質 (Menschennatur) を十分に発展させた人によって、倫理的な行為は行われる。そういう発展を遂げた人にとっては、善は、なすべきことではなく、なそうと欲することである (PF S. 233-4)。

この発言も、ニーチェの思想と根本的に同じことを主張していることが分かる。ただし重心の置かれる領域が異なっている。シュタイナーの場合、人間が自由を獲得することを、倫理性 (道徳心 Sittlichkeit) との関わりから見ている。ニーチェの場合、自由の目的は、意志 (力) がみなぎるか否かにある¹⁴⁾。

シュタイナーは、人間というものは、自分を完全に自由な状態にすることができれば、倫理的な存在になると述べる。そして、人が現在不自由な状態にあっても——本能的な衝動に引きずられがちであるとか、規範にただ従順であるなど——それは、必要な「準備段階 (Vorstufen)」、「通過過程 (Durchgangsstadien)」であり、自由な精神によって乗り越える (überwinden) ものであるとする (PF S. 180-1)。これは、ニーチェの「超人」を想起させる主張である。

シュタイナーは、究極のところでは調和を確信する哲学をもっていたことから、ニーチェの思想の内に (実際に書かれはしなかったものの)、次のような可能性を読み取り、評価した——「人間社会における調和は、もしその社会の構成員が独立不覇の人々であれば、ひとりでに生じるものである……この見解をもっているがゆえに、自由な精神の持ち主は、……動物的本能に従おうとするばかりでなく倫理的動機や自分自身の善悪をも創り出せる人々たちに対しては、完全なる自由を望んでいるのである」 (FN S. 93)。

しかし先に述べたように、両者の間で、重心の置かれる部分が異なっていることから、教育思想として受容できる範囲・領域に違いが生じる。この差異から、ニーチェの道徳批判そのものの真意と限界を捉えることができる。そこで、次にこの点を考察していきたい。

3. ニーチェの「超人」思想の限界

シュタイナーはニーチェの主張に完全に賛同したわけではなく、ある不足を認めていた。その点について、シュタイナーは著書の中で僅かに言及している。彼はニーチェが自分自身の本能に囚われ、人間内部のさまざまな衝動の発展段階を識別せず、意識 (Bewußtsein) の意義を過小評価したと指摘する。その傾向は、ニーチェが19世紀の自然科学の影響を本能によって受けとめたことから生じているという。以下、これらの指摘を元に、ニーチェの「超人」思想の受容の可能な範囲を確かめていくことにする。

シュタイナーは、ニーチェが進化論と結びついた様子を次のように説明する——ニーチェは、繊細な感受性をもっていたが故に、「無私な動機 (die selbstlosen Triebe)」の存在を疑う気持ちを次第に強めた。感受性の鋭さは、他からの刺激に対する激しい防衛衝動となり、その衝動から生存競争の思想を、自分の「感受性に合わせて作り変えた (umdeuten)」¹⁵⁾。この洞察は的確であると思われる。ニーチェの内に組み入れられた生存競争の観念は、人間が「善」への衝動から隣人愛や平等の意識をもつことをも、弱い本能の現れとしかみないという欠陥を生じさせることとなった。

また、ニーチェは、精神的に追求されるべき善の価値を、『『永遠』や『彼岸』と共に捨て去らずにはいられなかった¹⁶⁾。このことから、人間が希求したいと願うはずの精神や理念への深い探求が、ニーチェの思想の中から失われてしまった。そして、シュタイナーにおいてはごく当然のこのように語られる確信——「自由な人は、別の自由な人と自分が一つの精神の世界に属しており (der andere Freie mit ihm [dem Freien] einer geistigen Welt angehört)、同じ志向の中でその人と出会えると信じて生きている」 (PF S. 166) ——を、ニーチェは得ることができなかった。このことから、ニーチェの「超人」思想には、確固たる方向性が与えられないこととなった。

ニーチェの思想には、以上のような不備はあるが、しかし、「超人」思想の核にある精神の変化へのメッセージは貴重なものであり、それ自体は有益である。シュタイナーは、ニーチェの「超人」思想を読む際、「道徳的想像力 (moralische Phantasie)」をはたらかせながら読むことが必要であると述べる。「道徳的想像力」とは、次のような概念である (下線は筆者による)。

「人間は具体的な表象を想像力を通して、理念全体の中からつくり出す。だから、自由な精神 (der freie Geist) が、自分の理念を具体化するために必

要とするのは、道徳的想像力なのだ。」(PF S. 193)

すなわち、「道徳的想像力」とは、筆者なりに噛み砕けば、人間が、直面するさまざまな状況において、その都度自分の行動原理を具体化して行動に移していくための力であり、個々人それぞれの内(真・善・美などの本質存在のはたらきかけているところ)から、ふさわしい内容を直観し、汲み出す力である。

ニーチェの「超人」思想には、確かに、この力を用いてニーチェの本能の色濃い主張の中の理念的欠落を補っていくことが必要であり、またそうすることでその思想の精髓と、語られずにいた発展的内容とを一人一人が自らの力で受け取ることができるのである。その取り組みにおいて、シュタイナーの思想が非常に役立つことは、これまでの叙述により明らかであろう。

おわりに

教育学では、この「超人」思想を、ニーチェの自己教育(あるいは自己形成)思想の中核ととらえ、解釈を重ねつつも、ニーチェの主張のすべてを教育学理論として受け容れることにはためらいがあった。そのために、「教育者」として受けとめるか、字義通りではない言葉の解釈からメッセージをとらえようとする試みが多かった。

シュタイナーによるニーチェ論は、大筋では従来重ねられてきたニーチェの自己教育(形成)論的解釈の枠に沿っている。しかし、シュタイナーはニーチェと同じ見解に到達していた者としてその思想を根本的に理解し、そのエネルギーに満ちた批判的言辞の真意をどのように理解するべきか、またニーチェが試みて十分に果たし尽くせなかったことがどの辺りにあるのかを示すことに成功しているといえるだろう。

「超人」思想に託してニーチェの訴えようとした内容の精髓は人間個々の自己に立脚した生き方にあるということが明らかにされている。

ニーチェは、人間が自らの求める道を追求していくこと、そして自分の人生を支配することを願った。その道は、一人一人が自分の意志で切り拓いていくものであり、個人の内発性に完全に貫かれたものであった。教育学がニーチェの「超人」思想に見出すべき最も深い意義はここにある。

この意図のもと、ニーチェは激しい道徳批判も展開した。それは、個人の内からの自己形成にとって妨げとなる外部からの影響の一切を取り除くことを目的としていた。なぜなら、人間は自らの人生を支えるものとして自分で価値(観)を獲得していくものだからである。どん

なに崇高な価値であっても、本人に承服できない内容の価値である場合、その人はその価値を真に自由に用いることはできない。その場合、もしその価値の命じるところに従っていたとしても、操り人形のように主体性を奪われてしまっている。このような見方は、シュタイナーの思想と合わせて「超人」思想を読むことによって得られる。この解釈もまた、教育にとって有益な見解であるだろう。

ニーチェの道徳批判には、教育思想としての観点からは見過ごせない欠陥として、本能的で、善に向かう方向性をもたされていないという点が挙げられる。この欠けた側面に惑わされないためにも、シュタイナーのニーチェ論は有効である。「超人」思想は、シュタイナーの解釈により確かな実感をもって、「自由」を目指す思想であること、そのために、個々人の発達を内なる力(さまざまな衝動)に委ね、一方的に概念や道徳意識などを刷り込むことを拒否するという意図のもとに語られていることが明かされる。

「超人」思想により伝えられた自己形成の思想は、本質的に非常に重要なものである。現代、教育を取り巻く状況は、意志の力を十分に考慮しようとしていない。意志を尊重することよりも、早くから知的な力の訓練を行い、客観的な秤によってその成果を調べることが教育の役割のようにみなされることが多い。個々人にとって得られた知識がどのように作用し、彼らの人生をどのように形づくるかに意味があるという点は見見過がされている。「超人」思想の精髓は、このような状況において有効な手立てとなろう。

註

- 1) 教育学としての最初の本格的な導入は、1907年にヴェーバー(Ernst Weber)によってなされた。
- 2) 『思想』(919号 2000年)のニーチェ特集での木前利秋による巻頭の言葉「ニーチェの痕跡?」においても、ニーチェの影響の大きさとともに、それが諸々の思想家の解釈を通しての間接的な影響であったことが述べられている。
- 3) 最近のものとしては、Eliyahu Rosenow (2000)、松原岳行(2004)。ロズノウは、ここ30年のドイツ語と英語によるニーチェの教育学的解釈を比較研究し、ドイツの教育学者においては、ニーチェが本質的に除外されていると分析、またアメリカでは、ニーチェを教育者としてみならず解釈に概ねまとまっているとみなしている。また、松原岳行は、新教育運動の流れの中にあつた当時のドイツにおける理想の教育者像と、作品におけるニーチェ像の特性との一致を見出し、ニーチェが「青年の危険な誘惑者」から、「教育学者」として以上に「教育者」として受容されていく過程を明らかにするが、それは、そのプロセスを通して、ニーチェ思想を教育学に導入する上での方法を考察するためであると述べている。
- 4) シュタイナーはニーチェについて、幾度か論じ、あるいは言及しているが、本論では、主として1895年に刊行された著書

- (Friedrich Nietzsche, ein Kämpfer gegen seine Zeit) を取り上げる。なお、訳文は、『ニーチェ——同時代との闘争者——』（樋口純明訳）人智学出版社、1981年に多くを負っている。
- 5) Aus »Mein Lebensgang«, Kapitel XVIII. (1924) In: Rudolf Steiner: Friedrich Nietzsche, ein Kämpfer gegen seine Zeit. 4. Aufl. Rudolf Steiner Verlag, Weimar 2000., S184.
 - 6) 後期ニーチェの著作である『ツァラトゥストラ (Zarathustra)』、『善悪の彼岸 (Jenseits von Gut und Böse)』、『道徳の系譜 (Genealogie der Moral)』、『偶像の黄昏 (Götzen-Dämmerung)』が挙げられている (Rudolf Steiner: Friedrich Nietzsche, ein Kämpfer gegen seine Zeit., S. 9)。
 - 7) 1886年刊行の『ゲーテの世界観の認識要綱 (Erkenntnistheorie der Goetheschen Weltanschauung)』。
 - 8) シュタイナーの自伝によれば、この著作へのニーチェからの影響は全くないとのことである (Aus »Mein Lebensgang«, Kapitel XVIII. In: Rudolf Steiner: Friedrich Nietzsche., S. 183)。
 - 9) ニーチェ研究においては、シュタイナーのニーチェ論に言及されることは非常に少ない。シュタイナーとニーチェの関係について、日本での講演録は一つある (「第一回 高橋巖講演会 ニーチェとシュタイナー」『昴』第1号 (2001年) 所収)。海外においては、シュタイナー文庫のホフマンの資料によれば、過去に少なくとも30程の研究がニーチェとシュタイナーの関係を扱っている (David Marc Hoffmann: Rudolf Steiner und das Nietzsche-Archiv. (Rudolf Steiner Verlag), 1993)。
 - 10) Über die Zukunft unserer Bildungs-Anstalten. (1872) In: Karl Schlechta (Hrsg.): Friedrich Nietzsche. Werke in Drei Bänden. Bd. 3. Carl Hanser Verlag, München/Wien 1956., S. 244. 訳語は、主に筑摩書房の全集 (「われわれの教育施設の将来について」『哲学者の書』(渡辺二郎訳) に拠っている。
 - 11) 本論で参照した原書および訳書は次のものである。Also Sprach Zarathustra (1883-5). In: Karl Schlechta (Hrsg.): Friedrich Nietzsche. Werke in Drei Bänden. Bd. 2. Carl Hanser Verlag, München/Wien 1955. 『ツァラトゥストラ 上・下』(吉沢伝三郎訳) 筑摩書房、1993年。
 - 12) 相澤伸幸は「『ツァラトゥストラ』にみるニーチェの自己形成思想」(『教育哲学研究』第78号、1998年)において、ニーチェの教育的解釈の難しさをふまえながら、「超人」と「幼子」のイメージを重ね、それが柔軟で多様な自己形成を表す象徴ととらえている。
 - 13) 使用したのは、Rudolf Steiner: Die Philosophie der Freiheit. Grundzüge einer modernen Weltanschauung (1894). Rudolf Steiner Verlag, Dornach/Schweiz 1996. なお邦訳は、『自由の哲学』(高橋巖訳) 筑摩書房、2002年に拠っており、訳文もほぼ準拠している。
 - 14) 例えば、次のような表現——「高い段階に立つのは、『黄金の本性 (die »goldene Natur«)』である。……『汝なすべし (»du sollst«)』よりも高い段階に立つのは『我欲す (»ich will«)』(英雄)。『我欲す』よりも高い段階に立つのは『我在り (»ich bin«)』(ギリシアの神々)」(Aus dem Nachlass der

Achtzigerjahre. In: Karl Schlechta (Hrsg.): Friedrich Nietzsche. Werke in Drei Bänden. Bd. 3., S. 425)。

- 15) Friedrich Nietzsches Persönlichkeit und die Psychopathologie. (1900) In: Rudolf Steiner: Friedrich Nietzsche., S. 158-160.
- 16) Die Persönlichkeit Friedrich Nietzsches Eine Gedächtnisrede. (1900) In: Rudolf Steiner: Friedrich Nietzsche., S. 181.

引用・参考文献

- Karl Schlechta (Hrsg.): Friedrich Nietzsche. Werke in Drei Bänden (1954-6). Carl Hanser Verlag, München/Wien 1955-6. (※邦訳では、ちくま学芸文庫 (理想社) ニーチェ全集を参照)
- Rudolf Steiner: Friedrich Nietzsche, ein Kämpfer gegen seine Zeit (1895)., 4. Aufl. Rudolf Steiner Verlag, Weimar 2000. (『ニーチェ——同時代との闘争者——』(樋口純明訳) 人智学出版社、1981年) ※本文中でのこの書からの引用に関してはFNと略記した。
- Rudolf Steiner: Die Philosophie der Freiheit. Grundzüge einer modernen Weltanschauung (1894). Rudolf Steiner Verlag, Dornach/Schweiz 1996. (『自由の哲学』(高橋巖訳) 筑摩書房、2002年) ※本文中でのこの書からの引用に関してはPFと略記した。
- Eliyahu Rosenow: „Nietzsche als Erzieher“ kontra „Nietzsche in der Pädagogik?“ Ein Vergleich der anglo-amerikanischen und der deutschen Nietzsche-Interpretationen am Vorabend des 21. Jahrhunderts. In: Zeitschrift für Pädagogik Jg. 46. Heft6. 2000, S. 867-879.
- David Marc Hoffmann: Das Menschenbild Rudolf Steiners. In: Humanismus: 56 Annäherungen an einen lebendigen Begriff. GS Verlag, Basel 2000, S. 150-152.
- 「第一回 高橋巖講演会 ニーチェとシュタイナー」:『昴』第1号、2001年。
- 相澤伸幸「『ツァラトゥストラ』にみるニーチェの自己形成思想」:『教育哲学研究』第78号、1998年。
- 松原岳行「『教育者としてのニーチェ』という解釈モデルの成立過程とその意味——1907-1914年のドイツ教育学におけるニーチェ受容——」:『教育哲学研究』第89号、2004年。
- 宮澤知恵美「ニーチェにおける言語と自己形成の問題」:『教育哲学研究』第67号、1993年。
- 今井重孝「ホリスティックな学問論の試み ——ルーマンからシュタイナーへ——」: 青山学院大学文学部『紀要』第43号 2002年。
- 曾田長人『人文主義と国民形成 ——19世紀ドイツの古典教養——』知泉書館、2005年。
- 矢野智司『自己変容という物語 生成・贈与・教育』金子書房 2000年。
- ※本論は、2005年11月6日、関東教育学会第53回大会における発表原稿が元になっている。